

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：24501

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12370

研究課題名（和文）契丹大字と契丹小字の比較に基づく契丹大字表記システムの解明

研究課題名（英文）Comparative Studies on Khitan Scripts: Exploring the Khitan Large Script Writing System

研究代表者

武内 康則 (Takeuchi, Yasunori)

神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員

研究者番号：40725371

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、10-12世紀に東アジアで使用された契丹文字を対象としている。契丹文字は契丹大字と契丹小字の2種類の文字体系からなるが、そのうち解読が進展している契丹小字の研究成果を契丹大字テキストの分析に用い、契丹大字の解明を進展させることを目的としていた。契丹小字・契丹大字テキストに対する文献学的研究を進め、同語表記の収集を行い、その比較研究を進めた。その結果、これまで明らかになっていなかった契丹語の数詞やそれに関連する派生形態論を解明することができた。このほか、契丹大字と契丹小字で表記された語彙には一部に差異が存在する可能性が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

契丹文字によって表記された契丹語は、モンゴル語史の初期段階を解明するための非常に重要な言語であると考えられている。本研究の成果によって古代モンゴル語の1種としての契丹語の特徴が明らかとなり、研究対象としている契丹語だけでなく、周辺領域の研究においても重要なデータを提供することになる。また、契丹文字は漢字を元にして作製された文字体系であるが、中国語とは異なった言語を使用していた民族が、如何に漢字を自らの言語を記すために用いたのかといった文字の作成・使用のプロセスは文字論の観点からも非常に興味深いテーマである。

研究成果の概要（英文）：This study deals with the Khitan scripts used in East Asia from the 10th to the 12th century. The scripts consist of two distinct systems - the Khitan Large Script and the Khitan Small Script. Our goal was to improve our understanding of the Khitan Large Script by utilizing findings from ongoing research into the decipherment of the Khitan Small Script. We advanced our philological studies of both the Khitan Small and Large Scripts by collecting instances of their use and conducting extensive comparative analyses. This approach led us to examine previously unexplained aspects of Khitan numerals and their associated derivational morphology.

In addition, our research uncovered potential differences in the vocabulary used in Khitan Large and Khitan Small Scripts, adding a new layer of understanding to this historical writing system.

研究分野：歴史言語学

キーワード：契丹語 契丹文字 モンゴル諸語 歴史言語学 言語再建

## 1. 研究開始当初の背景

契丹文字は、10-12世紀に東アジアで使用されていた文字であり、契丹国(遼)を建国したこととよく知られる契丹族が使用した契丹語を記録するために使用された。契丹文字の解読は近年進展したが、まだ不明な部分も多く、更なる研究が必要である。契丹文字は、契丹大字と契丹小字の2種類の文字体系からなる。このうち、契丹小字は契丹大字と比較して、出土資料の多さ、文字素の少なさ、語境界の明瞭さ、など好条件が重なり、解読が進んでいる。一方で、契丹大字に関しては、資料数も少なく、解読が遅れている。

契丹文字によって記録された契丹語は、モンゴル系の言語と関係があると考えられている。したがって、契丹文字の解読が進み、契丹語の姿が明らかになれば、初期モンゴル語史を研究する上で重要なデータを提供することになると考えられている。また、契丹語の資料は契丹の歴史研究においても重要であることから、契丹文字資料の解読が進めば、歴史研究にも貢献すると考えられている。

## 2. 研究の目的

契丹語資料に対する文献学的研究は、近年めざましく発展している。新資料に対する研究が発表されるのに加え、契丹語の言語学的研究が進展し、契丹文字の背後にある言語形式を単位とした分析が可能な段階にまで到達しているといえる。しかし、これらの知見は主として契丹小字テキストを対象とした研究より得られたものであり、契丹大字テキストではそれらがどのように反映されているのかについては明らかではない部分が多い。

契丹文字は2種類の文字体系からなるが、それらの文字によって記された言語はいずれも同じ契丹語であったと仮定することができる。その仮定に従えば、契丹小字の解読成果を契丹大字資料の研究に利用することで、契丹大字の更なる解読が期待できる。このような研究は、近年海外の研究においてもなされつつあるが、多くの場合、文字素を単位とした比較研究にとどまっていることが多い。

そのような先行研究の問題を踏まえ、これまでに公開されている契丹大字テキストを網羅的に扱い、推定音素形式単位でのより精緻な契丹大字の契丹大字・契丹小字の比較研究を進める。同時に、本研究で仮定としている、契丹大字によって記された言語と契丹小字によって記された言語が同一であるかどうかを、比較研究を進めながらその整合性を分析することによって考察を加える。結果として、これまで十分に明らかとなつてこなかった契丹大字の表記システムを明らかにすることが目的である。

## 3. 研究の方法

(1) 先行研究を基礎として、契丹小字テキスト及び契丹大字テキストに見られる同語表記を収集し、契丹小字の解読成果から得られる推定音素形式を対応する契丹大字の表記に当てはめ、他の文字の出現箇所においても問題なく整合性がとれるか分析することによって、契丹大字の文字素の音価推定を行う。

(2)(1)で示した作業は1度で完了するものではない。(1)の作業を行うことで新たに契丹大字テキストにおいて読解可能な箇所が増加したならば、その成果を反映した状態で再度作業を進め、更なる文字の解読を進めることとなる。このような作業を十分な信頼性が得られているかどうか検証しながら繰り返し行う。

(3) 上記で示した比較研究から得られたデータおよび各資料に対する実証的な文献学的考察に基づき、契丹語の言語特徴等について言語学的方法を適用して分析を進める。

\* 契丹大字テキストと契丹小字テキストの比較作業においては、電子化した契丹小字テキスト・契丹大字テキストを用い、コーパス言語学等のデジタル人文学の手法を主として用いた。

#### 4. 研究成果

本研究の成果としては、主として下記のものを挙げることができる。

(1) 契丹語の数詞の一部は、その発音が明らかでないものがあった。たとえば、契丹語の「30」を意味する語は、契丹語と関連する言語の発音が漢文資料に断片的に記録されていることから、それを元に発音が推定されていたが、契丹語テキストの分析によってその発音が特定されたわけではなかった。本研究を通して、契丹語の「30」を表す文字が、契丹大字テキストでは表音的に用いられている例を見いだすことができ、その発音を推定することができた。この成果については国際学会にて発表したほか、現在準備されている論文集に掲載される予定である。

(2) 契丹語の数詞に関しては、基数詞のほか、序数詞などの数詞の派生語が存在する。このうち序数詞については比較的研究が進んでいるが、それ以外の数詞の派生語については明らかではない部分が多い。本研究によって、契丹語には年齢の表記に用いられる数詞の派生語が存在し契丹小字・契丹大字いずれのテキストにおいてもその使用が確認できた。この研究成果については国際学会にて発表したほか、研究成果を論文としてまとめ、学会誌に投稿中である。

(3) 契丹小字テキストおよび契丹大字テキストに含まれる漢語要素を収集し、それらに反映されている契丹語の音韻体系の特徴について考察を加えた。これらに関しては分析結果だけではなく、収集した漢語要素のデータ自体が漢語音韻史などの関連分野の研究において利用可能であることから、収集したデータをまとめ研究書として出版する予定となっている。

(4) 契丹小字と契丹大字の比較研究を通して、契丹小字の研究成果を利用することによって契丹大字テキストを解釈しうるものが明らかとなったが、その一方で一部の語彙の表記においては少なくとも文字表記上示される発音が契丹大字テキストと契丹小字テキストとで異なっているように見られる語彙が存在することが明らかとなった。これらがそれぞれの文字の背景にある言語の差異によるものであるのか、文字の表語方法によるものであるのか、まだ現段階では明らかではないが、この問題に関しても研究論文にまとめ、学会誌に投稿中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山根弓果, 武内康則	4. 巻 2
2. 論文標題 冒頭文および天贊元（九二二）年	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 遼史訳注稿	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasunori Takeuchi	4. 巻 39
2. 論文標題 Review of Languages of Southern Mongolia and North China by Andrew Shimunek	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Mongolian Studies	6. 最初と最後の頁 134-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yasunori Takeuchi
2. 発表標題 An Analysis of Some of the Khitan Numerals
3. 学会等名 Commemoration of the 100th Anniversary of the Discovery of Khitan Scripts and the 5th International Symposium on Khitan Studies（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yasunori Takeuchi
2. 発表標題 On the Reconstruction of Khitan Numerals
3. 学会等名 The First International Symposium on Mongolian Studies of China, Mongolia and Russia（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------